

平野 一郎：ヴァイオリン協奏曲 第一番 〈○△□〉

HIRANO Ichirô: Violin Concerto No.1 “○△□”

— 十牛図に拠る十牛譜 — (2026／成田達輝委嘱／世界初演)

-Ten Echoes from the Ten Oxherding Pictures- (2026 / Commissioned by NARITA Tatsuki / World Premiere)

第一：尋牛 □	I: Jingyû searching for the ox
第二：見跡 □△□	II: Kenjaku seeing the traces
第三：見牛 □△	III: Kengyû seeing the ox
第四：得牛 △□△	IV: Tokugyû catching the ox
第五：牧牛 △	V: Bokugo taming the ox
第六：騎牛帰家 △○	VI: Kigyû-kika riding the ox home
第七：忘牛存人 ○△	VII: Bôgyû-sonnin the ox forgotten
第八：人牛俱忘 ○	VIII: Ningyû-gubô both the ox and self forgotten
第九：返本還源	IX: Henpon-gengen back to the source
第十：入廛垂手 ○△□	X: Nitten-suishu entering the marketplace

○△□

平野 一郎

昨秋九月下旬のある夜めずらしく電話が鳴った。出るとヴァイオリニストの成田達輝さんが藪から棒に「突然ですが平野さんにヴァイオリン協奏曲を書いてほしいんです」とのこと。様々な話題を飛び回り共鳴の歓びを噛み締め、ヘリゲル『弓と禅』の話から日本の霊性に話が及ぶや、当方の頭には○△□と十牛図が浮かんでぐるぐる巡りはじめ、電話を切るや早くもタイトル&サブタイトルが見えた。慎重を期して数日寝かせた十月初め、確定したスコアの表紙を成田さんに送ると、「すごい。きのう金沢で鈴木大拙館に行ったばかりだし、十牛図は今年の春に芸大の美術館で見て感心していました！なんという偶然」との返信。シンクロニシティ飛び交う驚きの展開となった。

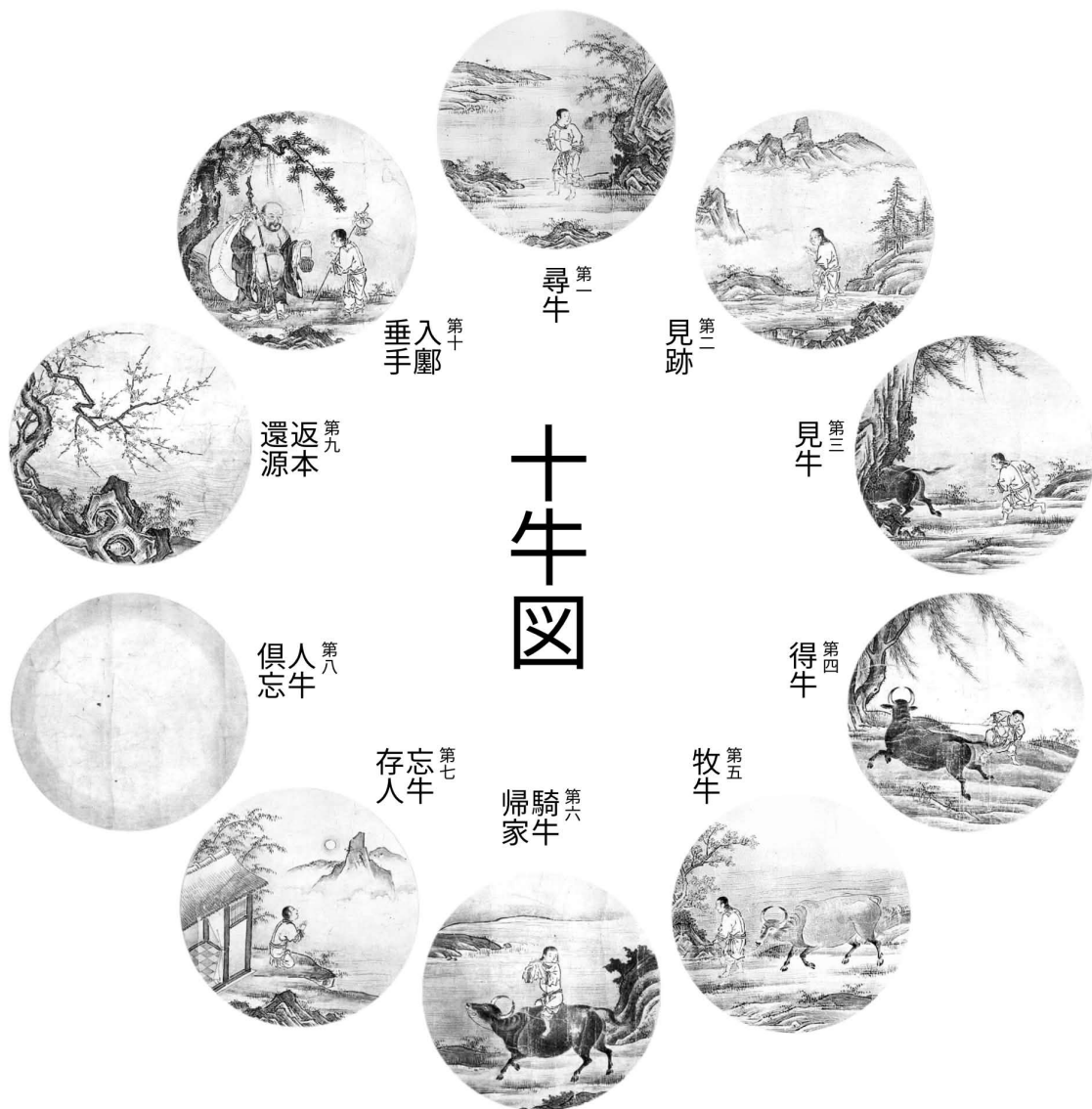
そうして夢中で開始した作曲は、独奏ヴァイオリン＝ヴァイオリニストの化身する求道者たる主人公が“牧童”となって十牛図の物語の中に潜り込み、失われたかけがえのない“牛”を求めて七転八倒するうち一種の“毀れた”成長物語(ビルドゥングスロマン)があれよあれよとひとりりで紡ぎ出された。今春 4 月に出来上がってみると総譜 157 頁 33 分連続する全十楽章、独自の響きが一見ふつうの西洋式コンチェルトの形に成りすまして進行するも、その枠が破れた後、溢れるばかりに紛うことなき東洋の新たな古典たる協奏曲が現れた。

これは私にとって禅にインスパイア否インカーネイトされた最初の作品である。現代芸術の世界で禅といえばストイックでコンセプチュアルで時にスタイリッシュですらあるような捉え方はよく見られるが、十牛図が示すように(つまりは 56 億 7 千万年待ちきれなかった弥勒菩薩が呑んだくれの布袋和尚の体の中に潜り込んで市井の人々と交わり市聖と成ったように)、衆生と共にある日本の、そしてアジアの禅の本懐をなりふりかまわず貫く、極めて珍しい作品が産まれてきた、と自覚している。

なおタイトルの○△□は、名高い仙崖義梵の禅画はもちろん、泉鏡花『春昼』および『春昼後刻』や宮崎駿『君たちはどう生きるか』に至るまで、真円相に向かう悟りの諸段階(□→△→○)を表したり、森羅万象の秘密を宿すエレメンタルな抽象表現となったりする。ここでは銜いなく「まる・さんかく・しかく」とも、鈴木大拙に倣って The Universe とも、十牛図あるいは十牛譜の三文字の伏字とも、自由気儘に読んで解して一向に問題ないが、いずれともあれ【問いそのものが即ち答えである】在り方を体現する、協奏曲自身の“名が体を表す”謎かけ即ちココロである。

＝十牛図（相国寺・伝周文筆）および十牛譜解題＝

宋の廓庵禅師に始まる十牛図は、真の悟りに至る十の段階を、失くした牛を探し求める牧童の物語に擬えた禅画である。禅の奥義を示すこの絵は同時にあらゆる道に通じる真実を示している。試しに円形に並べてみると終わりが始まりに繋がっていると気づく。ただ若者が布袋尊に出会った、のではなく、若者が長い時を経て布袋尊と成り次の若者に何かを伝えたのだ、と。



第一尋牛 うしをさがす。浮世の喧騒と袂を分かった若者は一心不乱、大切な“牛”を求める孤独な求道者となって駆けだす。

第二見跡 うしのあしあとにきづく。自らが踏む風土にひとたび目覚めてみると、至る所、四つ足の牛の足跡だらけである。

第三見牛 うしをみつける。足跡が巧まず示す気脈水脈を辿っていけば、やがては牛の声（哂）が己の耳に届くであろう。

第四得牛 うしをつかまえる。遂に見つけた牛の首に縄を掛け七転八倒、力任せに牽けども動かずモウモウ嫌と哭くばかり。

第五牧牛 うしがなつく。牛と揉み合い図らずも天手古舞を踊っていると不思議やな、徐に牛が懐かしい鼻声で甘える。

第六騎牛帰家 うしのせにのってかえる。今やすっかり心通じた牛の背に跨り楽しく笛で童唄うたいながら古郷へ凱旋する。

第七忘牛存人 うしをわすれる。自己成就したその暁、中空にかかる真ん円い月を拝んで、幸せな微睡に時が消える。

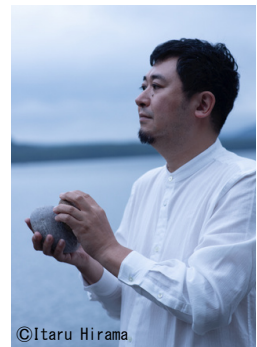
第八人牛俱忘 うしもじぶんもわすれる。無。空っぽの円。鼓鉞三通に導かれ原初の仏・威音王佛が大いなる哂の聲あげる。

第九返本還源 あるがままにもどる。花は紅、柳は緑。鳥が鳴き水が流れる。森羅万象が自然のままに戻ってくる。

第十入廬垂手 てをたらしひとびとのなかへ。瓢さげ市に入り皆にとけこみ万物と共に成仏しようぞ。夫諸佛真源衆生本有。

平野一郎（ひらの いちろう）略歴：

丹後國宮津生。1996年より各地の祭礼と音楽を巡る踏査を始動。2001年無伴奏ヴァイオリン曲「空野」Op.1を皮切りに作曲活動を本格開始、京都を拠点に日本列島の風土や伝承に根差した独自の作品を発表。響きや調べ、声と言葉の根源を探ね、失われた身体性・全人性を呼び覚ます音楽世界を志す。05年最初の管弦楽曲「かぎろひの島」で日本交響楽振興財団作曲賞最上位入選・日本財団特別奨励賞受賞。以後、青山音楽賞、京都市芸術新人賞、現音富樫賞・聴衆賞、令和元年度京都府文化賞奨励賞など受賞。“ISCM世界音楽の日々2008ウィリニウス大会”入選・参加。



2010年以後、^{イロコノミヤ}鱗宮交響曲（2010/芦屋交響楽団）いそぼのふわぶらす（2011/ザ・フェニックスホール）精霊の海（2011/館野泉）微笑ノ樹（2012/同前）二重協奏曲〈星巡ノ夜〉（2014/同前）四季の四部作（2014/吉川真澄）蜃気楼●協奏曲（2014/森本英希）八幡大縁起（2016/やわた市民音楽祭）鳥ノ遊ビ（2017/通崎睦美）^{キターラ}綺多羅（2017/大萩康司）ヤポネシアの森から（2021/金沢市民芸術村）双子の鳥（2022/同前）ピアノ・ソナタ第一番〈光人彷徨〉（2023/イリーナ・メジューエワ）獏印＊宝船（2023/日本音楽集団）天獄と地獄（2024/DieKohlmeise）龍ノ経（2024/IMAGINARC）人間ソナタ（2025/安達真理）弦楽四重奏曲第三番〈^{しんわりよくまたはこひのをだまき}親和力V恋芋環〉（2025/アミティ・カルテット）等委嘱作品を多数手掛ける。

2011年 京都・大阪で“女声と映像、15楽器によるモノオペラ〈邪宗門〉～南蛮憧憬の彼岸へ～”初演（13年再演）。17年より出雲芸術アカデミー／コンポーザー・イン・レジデンス拝命、ライフワークとして大管弦楽と声楽による「連作交響神楽」（現七作、全九部作）進行中。18年二面の正倉院復元（四絃／五絃）琵琶・笙・打物・8人の群声の為の^{こげんらんじょう}「胡絃乱聲」初演（国立劇場）、19年正月NHK8Kドキュメンタリー《落慶～奈良・興福寺》の音楽制作、同春四十二人の邦楽合奏の為の「とこよのはる」（森の会）を手掛けるなど新たな分野で注目を集める。21年宮津会館閉館に際し故郷で初の個展“海の聲 ほろびても滅びえぬもの”開催。初演。22年春多和田葉子書き下ろし台本による5幕のオペラ〈あの町は今日もお祭り〉（国立市）初演。同年秋よりピアノ五重奏曲「鬼の学校」（館野泉）が各地で上演されNHKドキュメンタリー《鬼が弾く》で大きく取り上げられる。23年春、京都での活動の一区切りとなる個展“異界現想”開催（京都コンサートホール／ArTRANDOM主催）。同年夏、初の東京個展“それのおと うみのいろ”開催（ヤマハホール／〈Code=“Shanti”〉主催）。24年洋琴としてのピアノと邦楽合奏の為の「水夢譚」（館野泉）が南相馬と東京で初演。弦楽四重奏曲「二十四氣」が24-25年の年末年始にWAONレコードからCDリリースされ各方面から絶賛を博す。現在は東京に新拠点を構え活動の領域をさらに広げ深めている。

「日本で最も個性的な作曲家」（音楽学者／沼野雄司）「独自の音楽表現を築く孤高の作曲家」（音楽ライター／小室敬幸）「新作初演に立ち会って、いま最も興味深い、面白い作曲家」「今後も確実に残り、聴かれ、語られ続ける作曲家」（音楽評論家／渡辺和彦）「平野一郎は現代日本で私が最も高く評価する作曲家のひとり」（ピアニスト／館野泉）「作曲家・平野一郎。一度でも彼の作品を聞いたことがあるならば、その個性的なサウンドと空間の虜となるだろう」（指揮者／齊藤一郎）「作曲家の平野一郎さんも物語の旅人である。彼は、物語、伝説、神話そのものから、それを求める旅の情景までを音で紡ぎだす。」（探検家／高橋大輔）^{ウルトラモダン}「平野の作品は、現実と幻想、超現代と遙かな太古を融合合わせ、忘れられた伝説や異界の音風景を今に蘇らせつつ、多彩な音楽世界を拓いている。」（建築家／マヌエラ・アントニウ）